

## 第 2 回世田谷区総合教育会議

日：令和 3 年10月23日（土）

午後 2 時30分開会

司会 定刻になりましたので、令和3年度第2回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

私は会議の進行を担当いたします政策経営部政策企画課長の松本と申します。どうぞよろしく願いいたします。

開催に先立ちまして、保坂区長より御挨拶を申し上げます。区長、よろしく願いいたします。

保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。

今日は今年度2回目の開催となります総合教育会議を、先ほどからの教育推進会議に続けて開催をしたいと思います。先ほどは「より質の高い乳幼児教育・保育の実践に向けて」がテーマでしたが、今日の総合教育会議のテーマは「子どもたちの自己肯定感を育てる」というテーマで議論をしたいと思います。

この総合教育会議というタイトルを初めて聞かれた方もいらっしゃると思います。平成27年、2015年から今年で6年目になりますが、自治体の首長である私が、今日御参集の教育長はじめ教育委員の皆様と、教育の大きな方向性や着眼点、そして改革の方向などを議論していくという場があります。とりわけ、そういった議論を積み上げてきて、問もなく、今年の年末になりますが、12月20日に教育総合センターという学びの拠点が新たに若林小学校の跡にオープンします。世田谷区の新しい拠点として、教育の質の変革という大きなターニングポイントを迎えつつあると思います。

そこで、教育を考える際に大変重要なのは自己肯定感。日本は海外の国々に比べて、子どもたちから若者まで自己肯定感があまり高くない。自分の存在なんかちっぽけなものであるとか、あるいは、何を言っても社会や地域、大きなものは変わらないというような無力感に陥るのではなくて、やはり自分はそれなりに役割を果たすことができるし、さらにその役割を大きくしていくこともできる、そんな志を子どもたちの内側から育てていくためにどうしたらいいのか。本日は藤田先生に御講演もいただきながら、議論を深めていただきたいと思います。それでは皆さん、よろしく願いします。

司会 ありがとうございます。

ここで本日の会議に参加されている教育委員会の皆様を御紹介させていただきます。

渡部教育長です。

澁澤委員です。

宮田委員です。

亀田委員です。

中村委員です。

参加者の皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

教育長と教育委員の皆様には、後ほど意見交換のところでお話を伺いたしたいと思います。

また、本日はオンラインで多数の方に御視聴いただいております。会議の後半には、皆様からいただいた御質問について、区長、それから教育委員会の皆様から回答をいただくコーナーを設けています。ZoomのQ & A機能での質問を随時受け付けておりますので、ぜひとも御利用いただければと思います。

それでは、本日の会議の流れについて御説明させていただきます。初めに、筑波大学人間系の藤田晃之教授より、「子どもたちの自己肯定感を育てる」をテーマに30分程度御講演いただきます。御講演いただいた内容を踏まえ、区長と教育委員会の皆様とで意見交換を行った後に、御視聴いただいております皆様からの御質問への回答、最後に区長より全体の議論の総括を行っていただく予定でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、早速ですが講演に移りたいと思います。テーマは「子どもたちの自己肯定感を育てる」です。藤田教授、よろしいでしょうか。

それでは、よろしくお願ひいたします。

藤田教授 それでは、画面の共有をさせていただいてよろしいでしょうか。

司会 お願いします。

藤田教授 皆様方、改めましてこんにちは。筑波大学の藤田でございます。

今、御紹介いただきましたように、今日は30分ほどお時間を賜りまして、「子どもたちの自己肯定感を育てる」についてお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず初めに、自己肯定感に関係する言葉、実は非常に近い概念なんですけど、自己効力感と自己有用感という言葉があります。日常生活ではこの3つはあまり違わないような使い方をされますけれども、実は微妙に違っているんですね。

一番下を御覧ください。自己有用感。こちらは、自分が誰かの役に立っている、あるいは自分が誰かから評価されていると認識できるときに生まれる感情です。つまり、誰か自分を褒めてくれる人がそこにいないと自己有用感というのはなかなか育たないんですね。一方で、自己効力感、これはあまり使わない言葉かもしれませんが、ある目的を達成する

ための計画を立て、自分ならそれができると信じる感情です。自分の能力に対する信念とも言われています。実はこの自己効力感というのが、自己肯定感を底支えする形なんです。ですから、この2つは非常に密接に関わっています。もちろん自己有用感も密接に関わるのですが、むしろ自己効力感と自己肯定感の距離が近いというのが一般的な理解です。

では、自己肯定感とは何かといいますと、ここに書いてございますように、ありのままの自分を認め、受け容れ、自分の存在を肯定する感情です。つまり、うまくいかないところも、ちょっと自分では嫌だなと思うところも、全部ひっくるめて、よし、これで僕は大丈夫だ、私はこれで大丈夫だというふうに信じることができる、そういう感情なんですね。本来はこの感情が一番大切なわけですが、それを底支えするのが自己効力感だと言われていいますので、まず、今日はこの自己効力感のお話を中心的にさせていただきたいと思えます。

先ほど保坂区長からも御指摘ございましたけれども、日本の子どもたち、実はこの自己効力感、そして自己肯定感が低いんですね。今日は、それを具体的に確認する意味で、国際学力調査、正式には生徒の学習到達度調査、PISAと言われるものですね。PISAと聞くと食べ物のように聞こえてしまいますけれども、画面の一番下のほうにちょっと小さいんですが、Program for International Student Assessment (PISA) という調査です。3年に1度、日本では高校1年生で、世界的には15歳の子どもたちを対象に行われています。

実は一番新しいのがPISA 2018なのですが、コロナの大きな世界的関心が集まる直前に結果が出たので、多くの皆様方は御記憶になっているかどうかはちょっと分からないのですが、実はこのPISA 2018、一番新しいものは、読解力の低下、学力の低下という新聞報道とともに日本では告知されました。

確かに日本の調査の中心的な役割を果たしている国立教育政策研究所の出したデータを見ましても、何となく下がっているなという印象を持つんですね。この波線は、実施方法がペーパー型の試験からコンピューター使用型に変わって、採点の方式とか基準点が変わってきたので、客観的には点数が上がったり下がったりは比べられませんねという意味で、ここに波線が入っています。

ただ、2015年、3年に1遍ですので2018年の前は2015年になるんですが、2015年と比べると、何か線が下がっている傾向にあるなということが印象としては残るかもしれません。

では、具体的な点数を見てみたいと思うんですが、読解力、数学的リテラシー、科学的

リテラシー、実はPISAは3領域なんですね。読解力と数学の応用力、科学の応用力です。

ここに挙がっていますのはOECD加盟諸国の順位なんですが、まず理科の応用力、科学的リテラシーを御覧ください。この波線、点線で囲ってある2つの国、エストニアと日本ですが、ここには有意差がありません。点数の有意差がないということは、統計的には同位、同じ順位というふうに読みます。ですから、日本はエストニアと並んで第1位なんですね。これ以上できる国はないというくらい、日本の子どもたちはできます。

数学は日本、韓国、エストニアが同じように波線でくくられています。この3か国が同率1位です。日本が527点で韓国が526点。おお、1点勝っているなというのは、統計的には正しくない読み方です。有意差がなければ点数はあまり意味を持たないということです。

では、読解力ですけれども、実はこれは英文の報告書を読まないとも有意差は分からないのですが、英文の報告書から引用しますと、1位グループ、2位グループ、3位グループ、4位グループ、そして日本を含めた7位から15位が5位グループです。実は1つ前、2015年では読解力は3位グループでしたので、3位グループから5位グループに確かに下がっています。ただ、御覧いただくと分かりますように、点数の有意差がほとんど見いだせないくらい点数が近いんですね。ですから、学力そのものが下がっているかどうかという、ここからはよく読み取れないというのが正直なところです。

大元締であるOECDが、2000年から始まったこのPISAの読解力の試験の大きなトレンドを分析しています。ぐうっと読解力が上昇している国、あるいはぐうっと下がってしまっている国、いろいろあるわけですが、実は日本は、2000年から2018年まで最も点数差が見られない国のうちのひとつなんです。ですから、日本の子どもたちは読解力が低下したかという、大きなトレンドで見ると低下はしていない。できるかできないかという、相変わらずちゃんとできている国です。数学と理科に至っては、OECD加盟諸國中、これ以上できないというくらいできる。ですから、日本の子どもたちに学力があるかないかという、めちゃくちゃあるんですね。

そして自己効力感ですが、このPISA2018年だけではなくて、PISA自体がずっといろんな意識調査をしているんですが、今日はその中でも自己効力感に関連するものを御紹介したいと思います。

こちらを御覧ください。

まず、ダイレクトに自己効力感ですが、物事は大抵何とかなる、物事を達成すると自分

を誇らしく思う、同時に複数のことを行うことができる、自分を信じることで困難を乗り越えられる、困難に直面したとき、大抵解決策を見つけることができる、こういった設問に対して、「強くそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という回答を求めています。

向かって右側のグラフ、ちょっと読みづらいんですけども、実はOECD加盟諸国に限らず、参加国全体で同じような調査を毎回ずっとやってきているんですね。最初の調査のOECD加盟諸国の平均点を0.0になるように調整しています。その0.0という数字から見て、肯定的回答が多ければ多いほどグラフが右に伸びます。否定的な回答が多ければ多いほどグラフが左に伸びるんですが、では、日本はどこかということ、極めて残念なことですが、一番下にいます。しかも、自己効力感がOECD加盟諸国の平均値から比べて、だんだんマイナスに傾いてくるわけですけども、日本にくるとほかの国の倍以上、ぐっと低くなる。ですから、これだけの国があって、日本は非常に自己肯定感、自己効力感の低い若者たちが住んでいる国だなということが、ここで分かります。

関連するところを少し御紹介いたしますと、失敗への不安、読み上げるのはやめますが、例えば日本はここ(上から6番目)にいるんですね。最も不安が強い国ではありませんが、極めて不安が強い国のうちの一つです。

それから、自らの人生の意義についての捉え方では、自分の人生には明確な意義や目的があるとか、あるいは、自分の人生に意味を与えるのは何かはっきり分かっているとか、こういった項目に対して先ほどと同じように4件法で答えた場合、日本の子どもたちはまた最下位になってしまいます。なぞることもちょっと悲しくなってしまいますが、ほかの国と比べて否定的な回答が極めて突出して多いというのが日本の子どもたちの特徴です。

このほかにも、国内の団体が行った調査、国際比較を今日は1つだけ御紹介いたします。日本財団が2019年に発表した18歳の意識調査なのですが、幾つか項目がありますが、例えば自己効力感に最も関連が深い、「自分で国や社会を変えられると思う」。やはり4件法ですけども、それに肯定的に答えた18歳の若者は日本で18.3%いるんですね。おお、2割もいるのかというふうに言いたいところですが、ほかの国と比べてみていかがでしょうか。よし、俺は変えられるぞ、やればできると思っている日本の若者が非常に少ないことが分かります。「将来の夢を持っている」、すぐ左隣ですが、60%持っているからいいかなと思いますと、ほかの国は8割、9割超えですね。ですから、日本の子どもたちは自信がない、将来展望が暗い、こういう傾向があります。

そして、最近報告されたOECDの報告書にはこのような指摘がございました。ちょっと日本語のところだけ、私が翻訳したものですけれども読ませていただきます。

「子どもたちがスキルを身につけ、そして生涯に渡って学び続けるための基盤と意欲を獲得するには、家庭、就学前教育施設、学校での取り組みが肝心である。(中略)そのような生涯学習に関係する姿勢の一つが自己効力感(self efficacy)である。自己効力感は、学問的な課題をこなすことに対する自信の度合いを表す」。やればできるというやつですね。「日本では、15歳の生徒の自己効力感の水準はOECD平均を下回った」。この15歳の生徒の自己効力感の水準というのが、先ほど御紹介したPIISA2018年の結果です。

これがそれなんです、一番高い国が0.36ポイントでメキシコ、一番低い国がマイナス0.61ポイントで日本で、日本はその一番低い国ですよということが書いてあります。

本文では非常に日本のメンツを立てていただいて、「日本では、15歳の生徒の自己効力感の水準はOECD平均を下回った」としか書いてありませんが、実際図を見るとビリであることが明示されているわけです。こんな状況なんです。

では、どうしたらいいのか。今日はここが大切ですよ。

先ほど申しましたように、自己肯定感との距離でいきますと自己効力感が一番近いんですね。自己効力感自己有用感が支えている部分もありますが、自己有用感というのは他人に依存する、他者に褒めてもらわないとなかなか自己有用感が出てこないの他人の存在に左右されてしまうんです。ですから、自己有用感だけを見ても、常に誰かに褒められるように、常に誰かから評価されるように、他人の軸で自分の行動を左右してしまうという危険性も若干指摘されているところです。ですから、自己有用感を強調するという方策よりも、むしろ自己有用感も大切にしながら、自己効力感を高め、それによって自己肯定感を高めたい、こういうふうなストーリーが最も望ましいのかなと思います。

その自己効力感ですが、実は3つの柱によって支えられていると言われてるんです。

まずは、成功体験。自分で何かを達成できたり、実現できたりした経験。やればできるじゃん、俺ってすごいじゃんというやつですね。

それから、代理体験。モデリングと言われることが多いですけども、ほかの人が何かを達成したり、実現したりする様子を観察し、そうか、こうやればいいのか、よし、次、頑張ってみようというの、頑張ってみようという気持ちを高めますから、自己効力感が高まってくるんですね。

それから、言語的説得。ちょっとこれは堅い言い方ですけども、言葉によって誰かか

ら励まされること。自分に能力があることを根拠を持って示されること。計画どおりできたねとか、何々をいつまでやると言ったけどちゃんとできてるねとか、何々を何回やると言ったけどちゃんとできてるねと、自分だけではなくてきちんと他者にも認められるということは非常に重要なことなんです。

ですから、今日、まず皆様方にお伝えしたいのは、学校生活は「宝の山」だということです。自分で目標を立ててできる、毎日宿題をやると決めて毎日宿題をやる。例えば合唱コンクールのときにみんなで練習をすると決めたら練習をする、先生に指されたら堂々と発表する、そういうことを含めて、いろんなことで「できた！」と思う経験は学校生活の中に山積みです。

それから、学校は共同生活ですから、いろんな子どもたち、先輩や後輩も含め、先生方も含め、こんなふうになればいいのかという学びもたくさんあります。それに、先生や友達、先輩や後輩、いろんな人たちから、「すごいね」「できましたね」「できたね」というふうに言われる経験も学校の中にはたくさんある。ですから、学校というのは自己効力感を高める大きな装置である、そういう仕組みであると見ることもできるんです。

しかも、その自己効力感を高める方策の一つとして、今日はキャリア教育を特に強調したいと思います。今日は時間の関係で全部は申し上げられませんが、このスライドの真ん中、赤い下線を引いてあるところを御覧ください。

キャリア教育というのは、将来、社会人・職業人として自立していくために発達させるべき能力や態度があるという前提に立って、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。このような視点に立って教育活動を展開することにより、学校教育が目指すものである。簡単に言いますと、生きていく上で自己肯定感や自己効力感は非常に大切なので、そういったものも含めて学校の教育活動全体を通して、そういう必要な力を高めていこうというのがキャリア教育です。

今日はキャリア教育についてお話しする時間ではないのですが、実はキャリア教育で発達を狙っている、大きく4つに分けられた力があるのですが、その中の一つ、この画面では右上ですけれども、自己理解・自己管理能力というのがあります。この自己理解・自己管理能力の中には、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動する、すなわち自己効力感を持って頑張る力を高める。これが前向きに考える力、自己の動機づけです。それから、左下、課題対応能力。適切な計画を立ててその課題を処理し、

解決することができる。計画を立てたらやれたぞと、この計画立案実行力なども自己効力感に極めて強く関わる場所です。

こういった力をキャリア教育ではどのように高めようとしているかといいますと、学校や地域の特色、大学も含めてですが、専攻分野の特性、子ども・若者の発達の段階によって力というのは異なるので、各学校がこの4つの能力を参考にしながら、それぞれの課題を踏まえて具体的な能力を設定しながら高めてください、これがキャリア教育の考え方なんです。つまり、目の前の子どもがどういう状態にあるのかということをしっかり捕まえた上で、この子どもたちにとって必要な自己効力感、自己肯定感は何だろう、それは子どもたちにどう育てたらいいのかなということを考える。これがキャリア教育の重要な考え方の一つです。

ですから、キャリア教育を通して、自己効力感を高めようとする場合、まず求められるのが現状の認識です。現状の認識と申し上げると、先生方は律儀なので、アンケートをしなくてはというふうにお考えになるかもしれないんですが、アンケートはつくるのも大変ですし、実施するもの大変ですし、集めるのも大変ですし、分析するのも大変なんです。なので、今、手元にある情報をしっかり活用していただきたいと思うんです。毎年毎年継続的になさっている意識調査が各学校にあると思うんです。それから、学校評議員の皆様方からの御意見の中にも関連する項目があるかもしれません。それから、必ずしなくてはいけない学校評価の中にも、既にそういう項目が設定されているかもしれないですね。

今日は全国学力・学習状況調査についてちょっと御紹介したいと思うんです。多くの皆様方は、全国学力・学習状況調査というと、全国の平均点と比べてうちの子どもたちができたかできないかという、いわゆる教科の点数に注目してしまいがちですが、この全国学力・学習状況調査も子どもたちの意識調査をしっかりしているんです。

それで、見ていただきたいんですが、先ほど御紹介した4つの基礎的・汎用的能力に係る調査項目というのがたくさんあるんです。例えば自己肯定感や自己効力感に関わる項目も混じっているんですね。「自分にはよいところがあると思いますか」、「強く思う」、「そう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」、「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦していますか」、こういったことはまさに自己効力感や自己肯定感に関わることです。

ですから、各学校では、もちろんアンケートをすることも重要ですが、こういった蓄積されたデータが学校にありますので、単年度だけではなくて、3年できれば5年くらいで

ータを見てみて、複数年度にわたって東京都の平均を下回ったり、全国の平均を下回ったりした項目に注目して、自分たちの子どもたちの特徴を踏まえ、そして具体の目標を設定するということが必要かもしれません。

ここでポイントになるのは、具体の能力です。身につけさせたい力、これが具体的にあっていれば最終的にアンケート調査をするときに楽になるんです。例えば、「必要なこと・すべきことには、不得意なことにも進んで取り組むことができる」、これはかなり具体的ですね。そうしますと、主語をつけて語尾を疑問形にするとアンケート項目になるんです。例えばこの場合、「あなたは、必要なこと・すべきことがある場合、それが不得意なことであっても進んで取り組んでいますか？」、アンケート項目になりますね。この「あなたは」のところを「あなたのお子さんは」にすると保護者の皆さんに答えていただけるアンケート項目になるんです。同じ目標に対して、本人たちがどう自己評価しているのか、保護者の皆さんがどう自己評価しているのか、その2つのデータを目の前にして、プロである教員が客観的なまなざしから、専門家としてのまなざしから、子どもたちの変容を捉えることができる。ですから、やっぱり重要なんですね。こういったところを考えていただくといいなと。つまり目標と評価の一体化です。

最近では、カリキュラムマネジメントということが言われており、その中でPDCAサイクルが非常に重要だと言われていますが、このPDCAサイクルの評価、チェックですけども、実は評価だけ単独では考えられないんですね。計画をするときに、目標を立てるときに、評価を前提として立てる。主語をつけて語尾を疑問形にしたら、きちんと子どもたちは答えられるかな、保護者の皆さんちゃんで見取れるかな、そういうふうに考えてつくるんです。そうすると、後で評価をしようとしたときに、目標に立ち返れば、その力が身についたことかどうかが分かりやすくなります。

1つだけ例を挙げます。例えばよく多くの学校でありがちなのが「コミュニケーション能力を育てる」という目標を掲げがちです。ですが、実はこのコミュニケーション能力を育てるといのは評価ができないんですね。コミュニケーション能力というのは非常に幅広い力です。全部読み上げませんが、語彙が豊かでそれを的確に使う力もコミュニケーション能力の一つです。初対面の人とも物おじせずに話すことができる力もコミュニケーション能力の一つです。情報を曲解せずに事実即して客観的に伝える力もコミュニケーション能力の一つですね。では、うちの学校でこの子たちに育てなければいけないコミュニケーション能力とは何なのかなということをしっかり考えて具体的に目標を立てる、これ

が重要です。

その具体的な目標というのは、子どもたちからすると、目当てなんですね。この学年が終わるまでにここまでできればいいのか、この学校卒業するまでにここまでできればいいのかと、目当てが明確になります。よし頑張るぞというポイントですね。そして、その目当てが達成できたときに「できたね」と言う役割は、先生方になります。

これが、コミュニケーション能力を育てるだと、いろんな要素が混じっていますから、どこで「できたね」と認めていいのか分からない。簡単に言うと、褒めていいのか分からないですから、褒めポイントという言い方がもしかしたら分かりやすいかもしれません。保護者や地域の方々にとっても同じです。家庭で褒めるポイント、あるいは社会的な活動、ボランティア活動であったり、職場見学であったり、商店街見学であったり、職場体験であったり、そういったときに子どもたちと接した際に、「おお、できたね」「おお、できるね」というふうに地域の方から褒めていただける、そういうポイントを学校として共有することはとても重要なんですね。

実は、この側面に関して世田谷区は全国をリードしています。とりわけ、尾山台小学校は全国モデルになっているんです。尾山台小学校では4つの力を、低学年、中学年、高学年、そして特別支援ごとに明確につけ、子どもたちと共有しています。多くのクラスで黒板の上、あるいは黒板の横に貼ってあるんです。目当てが明確になり、先生方も褒めポイントを常に心にとめて子どもたちをきちんと認めていく、こういったことが重要かもしれません。

そして、特に学校教育の中で、学校教育は宝の山だと申し上げましたけれども、先生方には、ぜひこの機会にそれぞれの教育活動を見いだしていただきたいんです。例えば運動会。コロナの影響でなかなかできなかった運動会ですが、これから、あるいはもう既に行った学校もあるかもしれません。この秋、運動会シーズンです。そのときに、例年やっているからやるではなくて、きちんと目当て、伸ばすべき力を意識して実施しているかどうか。幼稚園や保育所との交流会もそうです。無事終わればいいんじゃないですよ。この交流会を通して、去年まで幼稚園にいたこの1年生、去年まで保育所に行ったこの1年生がどれだけ成長したかなということをちゃんと認めようとする目当てが設定されているかどうかということが重要なんですね。

それからもう一つ、ちょっと長くなりますが、今から数年前、朝日新聞にとってもいい小さなコラムがあったので御紹介したいと思います。「民主的な社会に暮らす方法を学び

たいのならば、オーケストラで演奏するのがよいだろう。これはダニエル・バレンボイムという指揮者の方の言葉なんですけれども、これを見て、私は何てすてきな言葉なんだろうと思いました。ちょっとだけ読ませていただきます。これは実は私の研究室のホームページに書かせていただいたものなんですけど、棒読みいたします。

仮に、ある学校で、「一人一人の良さを認め、それぞれを大切にすることができる」「自他の良さを互いに活かしながら協力して生活することができる」などのキャリア教育の目標が設定されているとしましょう。

その学校におけるキャリア教育の実践にとって、音楽の授業は、絶好のチャンスの一つです。その理由は、バレンボイムの言葉を鷲田さんが読み解いてくださったとおり、音楽の授業の中に「他の演奏者の思いを量りつつ、追従したり、けしかけたり、互いに応じあう中で曲を作ってゆく。そう、他の人のために場所を残しながら、同時に自分の場所を主張する」というキャリア教育の“宝”があるからに他なりません。

無論、このようなキャリア教育の目標を全く意識しなくとも、合奏や合唱等の授業においては、それぞれのパートの音や声を聴きあい、主旋律を活かしながら、自分のパートの役割を果たして一つの楽曲を創り上げる醍醐味を体感することができるよう指導することが求められます。でも、教師が「今、自分が指導しているこの音楽の授業そのものが、この学校で目指しているキャリア教育の目標を達成するための重要な機会でもある」と認識し、それを子供たちに伝えなければ、子供たちは、音楽の時間における学習活動それ自体が「民主的な社会に暮らす方法」につながるものであることに気づき、「なるほど！」と実感することはできません。そのような場合、音楽での学びは音楽の時間内に閉じたものとなり、ややもすると「うまく歌う」「うまく演奏する」という知識・技能の習得に限定した学習活動にとどまってしまう可能性も否定できないと言えるでしょう。

まさに、それぞれの教育活動が自己効力感を育てる宝の山だという認識が重要なんですね。そういった宝の山、学校生活を送る上で、その記録を残し、学校や家庭や地域での学びを蓄積し、振り返りができるキャリア・パスポートも非常に重要になってきます。

さて、もう時間が参りましたのでまとめに入ります。今日はいろんなことをお話をさせていただきましたが、最後に皆様方にお伝えしたいのは、この2つです。

「できた」というふうに認めるのは子ども自身です。ですが、「そうすればいいのか」、「おおっ」という存在は友達だけではないです。地域の大人、家庭での皆様方の姿、そして学校での先生方が、ああ、そうすればいいのかというふうなモデルになっているかどうか

か。そして、先生方や保護者の皆様方、地域の方々が、できたね、目標設定できたねときちんと認め褒めているかどうか。こういうことが、実は自己効力感や自己肯定感を高めるときにとっても重要なんです。

子どもだけが頑張るのではなくて、大人がそれを支えていく、そういったことが大切だということを最後に申し上げて、私からのお話を終わりたいと思います。

御清聴いただきましたことに心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

司会 先生、ありがとうございました。日本の子どもたちが自己効力感が極めて低いという非常に衝撃的な国際比較の結果ですとか、その自己効力感を高めるためのキャリア教育、学校での目当ての設定、褒めポイントの共有など、非常にためになるお話をいただきました。どうもありがとうございました。

それでは、これより意見交換に移りたいと思います。

まず、区長にお伺いします。藤田教授の講演の中で、まずは自己効力感を高めること、学校生活はそうした体験の宝の山であるとのお話もありました。藤田教授のお話についてどのように感じられましたでしょうか、お話を伺いたいと思います。

保坂区長 藤田先生のお話、最下位という非常に分かりやすい、かなり極端な結果が国際比較で出ているということに、私もこの問題をずっと考え続けてきているんですが、大変衝撃を受けました。藤田先生のお話を聞きながら、実は自己肯定感という言葉、そのイメージが教育の中でどうして大事なのかということ、私自身がどうやって思い至ったのかというお話をちょっとだけさせていただきたいと思います。

私が学校現場で起きる事件や出来事、そして子どもたちの中で起きてくる様々な困ったことや、追い詰められた体験。象徴的に言えば、いじめだったり暴力だったり、こういうことに悩んでいるお子さんたちの特に中高生の手紙を、20代から30代にかけて子どもたちが読んでいる雑誌にノンフィクションレポートを書いてきたという立場で、たくさん受け取ってきました。5000通ぐらい受け取ってきたんですね。この中で、やはりいじめが長期化する。学校生活はあるところで終わるわけですが、その後10年、15年とずっと苦しみながら闘っている、そういう若者たちの手紙等を読んだときに、やはり自分は自分であっていいのだと。自分はいろいろできないこととか、不得意なことがあっても自分のままでいいんだというところが、いじめによってかなりのところで崩されてしまう。そうすると、それからの再建がとても難しくなるんだなということに気がつきました。いじめっ子はいなくなっても、自分が自分を否定する、これは自分いじめというふうに言いますけれども、

そういう状態に陥って、社会的なひきこもりという状態に、その後、30代、40代の長きにわたって苦しんでいる若者たちも現在も多いわけです。

そういった中で、それではいじめに限ってそういう問題が表面化するのだろうかということ考えたときに、いじめに限ってではなくて、実は学校教育を受けていく中で、私は私でこんなことができるんだ、やれるんだ、もっとやれるかもしれないというふうに思っていく部分、これは当然あるわけで、これを伸ばしていかなければいけないという今の藤田先生のお話だったんですが、逆にこんなにできなかった、ここも届いていない、あの友達はできるのに自分はできないというような、いわゆるマイナス評価、減点法的な評価といたしますか、そういうことがやはり日本の学校教育、あるいは日本の学校教育だけではなくて、社会の中でかなりやはり定着をできてしまってきたのではないだろうかということを考えてみました。

ですから、これからの学校教育、特に学びの質の転換ということを考えていったときに、今の自己肯定感にたどり着く、その手前の自己効力感、この問題提起、大変重要だと思いました。

ちょっとパワーポイントを出していただきたいと思うんですが、実は私が区長に就任して、やっぱり若者たちの居場所、そういう意味で、自分は自分でいいんだ、友達と何かをつくる、そういう場所をつくるための調査として使わせていただいたんですが、自分のことが好きですかと聞いたときに、平成25年の小学校の低学年では約半分、平成30年でもこの数字はあまり変わっていません。これは児童館とか学童、BOPなどに来ている子どもたちに尋ねた調査です。

次、お願いします。高学年になると、好きですというのが逆に増えてきて、頼もしいんです。

次、お願いします。しかし、中学生になったときに、左側の平成25年だと、「すごくそう思う」は13.2%とすごく縮みますね。「まあそう思う」を入れても半分まで行かない。

この状態から5年たって、各学校で自己肯定感の調査などもしていただきました。少しだけあかりが見えているというか、中学生になったときに、「まあそう思う」までを含めて半分ぐらいになってきたのかなと思いますけれども、逆に言うと「ほとんどそう思わない」という子も明確にいるわけで、まだまだ課題は大きいなと思います。

今度の教育総合センターで、この自己肯定感にたどり着く、今、藤田先生お話の自己効力感と、学校が宝の山だという部分の尾山台小学校は日本のトップを切っているというこ

となので、教育長からも後で話があると思いますけれども、そんなことを感じ、考えてきたということで、最初の発言にしたいと思います。

司会 区長ありがとうございました。区内での小中学校の生徒のアンケート調査なども踏まえながらお話をいただきました。

続きまして、中村委員にお伺いしたいと思います。学校長としての経験もあり、教育の現場経験の長い中村委員ですけれども、子どもたちの自己肯定感についてお考えをお伺いできればと思います。

中村委員 私も今、学校を離れていますので、ちょっと別の立場からも今日はお話ししたいと思います。今日のテーマに向けて、いろんな資料に目を通したんですけれども、国レベルでは、教育再生実行会議の第十次提言で自己肯定感について触れていますし、それに関する文教科科学委員会の報告などでは、逆に相反するデータがあって、本当に我が国の子どもたちは自己肯定感が低いのか今後も検討を要するという文面もあるんですが、様々なデータから、やっぱりちょっと低いと思います。

東京都では自己肯定感育成のQ & Aも出しています。そういったものを見てちょっと疑問に思ったのは、なぜ日本の子どもはそんな低いのかという、その辺の分析がどうも不十分ではないか。だから、背景になるもの、原因が分からないのに対策を考えても、不十分ではないかなという感想は持っています。

学校でやるべきことというのは、藤田先生がたくさん述べてくれました。授業改善でできること、学級活動でできること、様々な行事や何かを通しての体験活動や、それから最近どの学校でもやっていますけれども多世代・異年齢交流なども自己肯定感、自己効力感の向上に資するものではないかと思っております。

ただ、自己肯定感というのは、ある心理学者の考えでは、自尊感情には社会的自尊感情と基本的に自尊感情がある。基本的自尊感情というのは乳幼児期からの養育者との関係の中で育まれてベースになるものです。これが一番大事で、これに他者との関わりなどで社会的自尊感情が加わって、これがうまく同じ器の中で、同じ量になっているのが理想的な状態としております。この心理学者の先生に言わせると、学校は社会的自尊感情の指導に偏重しているのではないかと。もうちょっと基本的な自尊感情をうまく呼び戻すような指導も考えたほうがいいという御指摘もいただいております。

さらに、20年前ですか、有名な都立大の宮台教授が、渋谷に若者が集まる現象について述べて、若者は家庭、地域、学校以外の第4の場所を実は求めているのだと。学校、家庭、

地域では、例えばスポーツのできるAさん、勉強できるBさんというふうに、ある程度その人の立ち位置が確立してしまっている状況である。でも、そこから逃れて新しい自分を見いだしたい、そういう意味で、新たな居場所を求めているということを書いていたのですが、最近でも読売新聞編集委員の古沢さんが、教育雑誌で青少年の居場所をつくってほしいという記事を書いておりました。

やはり私も、家庭、地域、学校から離れたもう一つの場所があってもいいのかなと思っております。そういった意味で、今、世田谷区では希望丘青少年交流センターの「アップス」、上北沢の「たからばこ」というものをつくっていただいています。こういったものが、今後、世田谷区だけではなく全国的にも広がっていくと、こういう第4の居場所というものが、青少年または子どもの自己肯定感、効力感の向上に資するものになるのではと考えております。

司会 ありがとうございます。社会的自尊感情や基本的自尊感情について、また第4の居場所としての青少年の居場所の必要性などについてお話しいただきました。

続きまして、教育長にもお伺いしたいと思います。教育長には、世田谷区の子どもたちの様子ですとか、今後の教育政策等についてお考えをお伺いしたいと思います。

渡部教育長 それでは、まずパワーポイントを共有していただきたいと思います。私からは、世田谷区の子どもたちの状況と世田谷区の教育施策についてお話をさせていただきます。

先ほど藤田先生のお話の中にもありましたが、全国学力・学習状況調査の結果です。これは、文部科学省が日本全国の小中学校の最高学年、小学校6年生と中学校3年生を対象として毎年実施しています。令和3年度におきましては国語と算数・数学、それと質問紙調査をやっています。その質問紙調査の中で、先ほど藤田先生のお話になった項目が入っています。世田谷区の様子をお見せします。

先ほど4つの基礎的・汎用的能力の中の一つ、人間関係形成・社会形成能力です。

これがどういうものかということ、みんなで協力して取り組んでうれしかったことがある、進んで人を助けている、人の役に立つ人間になりたい、今住んでいる地域の行事に参加している、地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあるなどというのが人間関係形成・社会形成能力になります。

右側が中学校で、左側が小学校になっています。そして、平成30年度、31年度、令和3年度というふうに右側に行くにしたがって新しくなっています。これで見ると、肯定的と

いうものは、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」を合わせています。

一番下が全国の平均です。東京都の平均があって、そして世田谷区の平均があります。この一番青っぽい色、紺色に近いほうが全国と東京都よりいいものです。そして水色が、東京都よりいいけれども全国よりも低いものです。そして、赤いところが、全国、東京都よりも低いところです。

これで見ると、みんなで協力してうれしかった、進んで助けているというのは割と高く出ています。世田谷区の課題としては、地域の行事に子どもたちがあまり参加していないということが出ています。

このまま見ていきますと、先ほどお話があった自己理解・自己管理能力です。自分にはよいところがある、先生はあなたのよいところを認めてくれているというところです。ここで、先ほど区長がお話をされたところと少し違っているのは「自分のことが好きである」という聞き方と「自分にはよいところがある」という聞き方をしているところが違うということと、肯定的というのに「当てはまる」と「どちらかという当てはまる」も入れています。先ほどの区長のは「そう思う」だけに色がついていて、その次に「どちらでもない」というふうに分かれていたので、もしかしたら2つを足したものとほとんど変わらないのかもしれませんが。そういうふうに考えていくと、先ほどの資料も81%ぐらいのところがあるので、あまり違ってないのかもしれないです。

世田谷の子どもたちは、自己効力感、自己肯定感に関しては割と高めに出ているということですが、

次の課題対応能力です。最後までやり遂げてうれしかったとか、失敗を恐れなくて挑戦するとか、規則を守っている、計画を立てて勉強する、自分で考えて自分から取り組んでいたというところですが、これに関しても割と全国、東京都よりもポイントとしては高く出ています。自分で計画を立てて勉強しているというのは、平成30年が少し中学校では低くなっています。

次が、課題として出ているところです。キャリアプランニング能力です。将来の夢や目標を持っていますかというところは平均よりも高いのですが、下の2つのところが平均より両方とも低く出ています。国語の授業で学習したことが将来、社会に出たときに役に立つかというところがとても低いです。算数・数学もそうです。社会に出たときに役に立つということに関しては、あまり思っていないということが出ています。これが世田谷の子どもたちの課題、私たちとしても、今のこの学習が社会に出たときのためになるというこ

とを教えていくことが必要だなと思っています。英語だけは平成31年に行っていますが、英語は社会に役立つと子どもたちは思っています。

それから、自己理解・自己管理能力のところですか。ここは世田谷区の課題だけではなくて、全国の課題だと思っていますが、今、赤い線を引いたところを横に見ていただきたいんですが、全国の平均も東京都も世田谷区もそうですが、自己肯定感が年々下がってきています。中学校に関してもそうです。最初は78%、平成31年度は74%ですが、令和3年度には76%と、だんだん下がってきています。

それから、このキャリアプランニング能力も見ていただきたいんですが、これも年々下がってきています。将来の夢や目標を持っているということもだんだん下がってきています。中学生に関してもそうです。ここはこれから課題にしていくべきことと感じているところです。

先ほどお話がありました、世田谷区で子どもたちの自己肯定感を高めるためにやっていることに対してです。まずは、子どもたちのメタ認知力を高めるということを考えています。メタ認知というのは、客観的な自分を知ることです。これは、子どもにとってなかなか難しいです。自分がどういう自分なのかというのが分かりにくいので、活動を振り返ったり、自分の成長を確かめるために「学習の振り返り」をしたりしています。

最近よく聞かれるのが、小学校でも、これは2年生のときに学んだ勉強が3年生でこういう形になってきた。大きな数なども、2年生で学んだのよりもっと大きな数を3年生で勉強するようになったという、つながりを理解させるということです。

それから自己理解のところですか。後で時間があれば、キャリア・パスポート、藤田先生のお話になったところもお見せしたいなと思っています。

それから、先ほどの子どもたちの課題です。今の活動が将来の自分に役立つことを知らせるところです。

これは世田谷区で今取り組んでいることですが、キャリア・未来デザイン教育です。そこに書いてあるのを読ませていただきますが、「急速に変化する社会の中で、子ども一人一人が社会の担い手として、自らが課題に向き合い、判断して行動し、それぞれが思い描く未来を実現する子どもを育てる教育」です。この中にはキーワードとして、探求的な学び、個別最適な学びやキャリア・パスポートがあります。このキャリア未来デザイン教育についてはまた機会があれば詳しくお話をさせていただきたいと思います。

私からは以上です。

司会 大変失礼いたしました。ただいま音声が乱れて大変申し訳ありません。

先ほど教育長からお話をいただきました。

続きまして、宮田委員にお伺いします。宮田委員は、元区立小学校PTA会長で、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長の経験などもおありですが、藤田教授の講演の感想も含め、お考えをお伺いしたいと思います。よろしくお願ひします。

宮田委員 よろしくお願ひいたします。藤田先生のお話は、OECDの結果を見ながら、子どもたちの現状がどういったものなのかが大変分かりやすく伺っておりました。自己肯定感を高めると聞くと、大人はどういうふうにならしたらいいのかとなりますが、具体的な目標を決めれば、身近なことから取り組むことができるのだと思いました。自己肯定感については、これまでに教育に関する様々な場面で耳にしてきました。自己肯定感が高い低いと表現されますが、大人になり社会に出てからも人生に与える影響は大きいと、改めて思いました。

私は、日常生活の中で自己肯定感は育まれていくものと考えています。子どもがどのような環境で過ごしているのが大切で、保護者をはじめ幼稚園や学校の先生等、子どもの周囲にいる全ての大人が子どもとどのように向き合っているのか、関わり方が関係してきます。

以前、区立幼稚園を訪問した時のことです。1人の園児がにこにこしながら近づいてきてA4サイズの冊子を見せてくれました。見てすぐに手作りだと分かりました。その園児が知りたいこと興味のあることを調べたもので、全てのページには隙間なく文字や絵が描いてあり、内容についても園児が説明してくれました。中には資料が貼ってあるページもあり、一生懸命作ったことが分かりました。先生にお話を伺うと、そのお子さんはふだんから好奇心があり、知りたいことを自分で調べ、時には先生も資料集め等のお手伝いをして、子どもがやったことを残る形にしているとのことでした。子どもが自分で知りたい、やりたいと思ったこと、このように形にすることは子どもにとって大変貴重な経験になります。

昨年度、新型コロナウイルス感染拡大防止対策で休校になった際に、子どもたちが自宅学習になり、どのように学習支援をしたらいいのか、一日中顔を合わせているとつい叱ることが多くなってしまおう等、戸惑われる多くの保護者がいらっしゃいました。私自身、家庭での教育の在り方について、改めて考えるようになりました。

私は、子どもが小中学校、そして高校在学中はPTA活動を通して、学年、学校を超え

た保護者、先生方との交流の場があり、また研修会や講演会などでいろいろなお話を伺う機会がございました。今でも心に残っている言葉があります。「お子さんの中には日々新しい芽が育っています。その芽を摘み取らないでください。自分のお子さんを一人の人間として見て接してください。」下の子どもが小学校低学年のときに参加した講演会で、講師の方がおっしゃっていました。当時、私は頭では分かっているつもりでしたが、日常の子育ての中では意識していなかったことでしたので、講師の方の言葉にはっと気づかされました。

同様の場で子育てのヒントはたくさんいただいていたいました。子ども一人一人をありのままに受け止め、子どもに寄り添っていく。そして、個々に対応できる環境は家庭でも学校でも大事だと思います。それには人的な支援等、専門的な支援も必要になってきます。家庭においては、多忙で子どもと向き合う時間が十分取れないことも多いと思います。そのような場合でも、保護者の皆様が少しでも生活の中で子どもとの向かい合い方を意識して変えていけるようになると、子どもにとってよい環境がつかれると思います。

そのほか、私たち親世代が経験していない新しい学びについて、区で取り組んでいる教育に関することや、幼稚園、学校で取り組んでいることを保護者の皆様に情報連携をすることもとても大切ですので、分かりやすい丁寧な対応をお願いいたします。

学校については、例えば環境問題に関心がある子、天体に興味がある子や、手芸、お裁縫が得意など、子ども一人一人が学びたいことややりたいこと、得意なことを自分で選択し、自分に合ったやり方で学ぶこともできる場がある、夢や希望がある学校。それを地域の企業や大学の協力を得ながら形にしていくなど、周囲が子どもを認め、チャレンジする場所があることは、これから生きる子どもたちにとってキャリア教育にもつながる大変有意義なことだと思います。

司会 ありがとうございます。日常生活の中で自己肯定感が育まれるというお話で、区立幼稚園でのエピソードですとか、またPTA活動の中での講師からのお話などを紹介いただきました。

続きまして、澁澤委員にもお伺いしたいと思います。澁澤委員は、NPO法人理事長も務め、地域や大学、様々な企業にも関わりをお持ちですが、藤田教授の講演の感想も含め、お考えをお伺いしたいと思います。

澁澤委員 自己肯定感は、言葉では何となくみんな分かっているつもりなんですけれども、非常に捉えにくい概念だなと私は思っています。易しく言ってしまうと、自分がどう

幸せに生きていけるかということを考えることなんだと思っています。幸せにしていく、今までの何年間かはやっぱり経済成長が幸せだという社会の中にいましたので、そのことが見直されている現在では、どうしたら本当に自分が幸せに生きていけるかということが、とても今の社会では問われているんだろうなと思っています。

先ほど御紹介いただきましたように、私は大学でも教鞭を取っているんですが、今の学生たち、特にコロナになって、今年の学生たちの反応からすごくびっくりしたことは、その幸せをどちらかというところソーシャルネットワークの中に見つける子たちがとても多くなってきました。現実の社会は逆に今のままでいいんだと。私も日本財団発表のデータをいろいろ読ませていただいたんですが、大学生の行動と比べてみると、今が一番いいんです、変える必要はなくて、このままをずっと続けてほしいと思っている大学生たちがとても多くいます。そして、自分の居場所、自分の肯定感を持つのはソーシャルネットワークの中に見つければいい。ソーシャルネットワークの中に、先生が言うことよりも真理はあるし、ソーシャルネットワークの中に、大人の社会がつくっている偽善よりも本当の正しい形の社会があるんだというふうに、肌合い感として持っている学生が多いです。つまり、2000年以降に生まれてきた子どもたちの今の感覚なんだというふうに思っています。

やはり私たちが預かっている義務教育の子どもたちは、現実世界、肉体を持った社会の中で幸福感を見つけていけるような子どもになってほしいなと思っていますし、そしてその中で、私たちが確かに自分でD oを見つけて計画を立ててやっていくことも重要なんですが、それよりもこれからはB eの時代だと私も思っているんです。どう生きるか。つまりD oをしないということではなくて、小さいD oを積み重ねながら、そしてまた次にやっていこうと、D oを積み重ねていく意欲を持てる子たちをどうつくっていくか。

何々という職業になりたいという子どもたちではなくて、優しく生きていきたいとか、人に親切でありたいでもいいですし、そういうB eを自分の生き方として求める、それをキャリアとしていくような子どもたちを育てていきたい。そのためには、先ほど教育長のお話にもありましたけれども、社会の中で子どもを育てるという部分が、とても世田谷区は欠けているのかなと思っています。教育が往々にして学校現場に比重が多くなっていて、それを補う家庭があり、地域だとか社会というものが本当に顔が見えなくなってしまっている。先ほどの教育推進会議の中にもその提案がなされていましたが、やはりもう1回社会と子どもたちを触れ合わせて、別に企業や大学が正解を持っているわけではなくて、君たちと同じような悩みを持ちながら一緒に考えていく、君たちと寄り添って一緒に自分

たちも考えて前進していくんだというような経験をたくさん子どもたちに積ませてやりたいなと私は思っております。

司会 ありがとうございます。社会の中で子どもたちを育てる、そこが世田谷区の中ではまだ課題であるということ、経験を積ませていくことの大事さ、そういったお話をいただきました。

最後に、亀田委員にお伺いします。亀田委員は文部科学省に在職中、教育政策を立てた経験もあり、子どもたちの特別支援教育について造詣が深いと伺っておりますが、これまでの行政経験や不登校支援の御経験から、藤田教授の講演の感想も含め、お考えをお伺いしたいと思います。

亀田委員 ありがとうございます。自己肯定感ということで、自己肯定感は教育の第一義的な目的と言っても過言ではないと思います。しかしながら、一部学校教育の中では自己肯定感を持ちにくい面もあるのかなと。例えば先ほど区長もおっしゃっていたように、学校のテストは全部できて100点、できないところが減点されていくという減点主義なので、どうしてもできないところに焦点が当たってしまう。私なんかは、満点はなくてもいいのではないかなと。できたところに点数を加えていって、例えば125点とか168点とか、そういった点数のつけ方があってもいいのではないかなと、ちょっと象徴的に申し上げると、そう考えています。

これまでお話しあったように、自己肯定感を育むために、お子さんを認める、承認することが必要です。そして、承認する前提として、先ほど宮田委員もおっしゃっていましたが、お子さんが自分の考えや判断によって選択できる機会をつくることが必要と考えます。つまり選択したことを承認するということです。

例えば私が勤めている施設では、お子さんを支援する場面で、3歳のお子さんであっても選択してもらいます。「こっちのおもちゃと、こっちのおもちゃ、どっちで遊ぶ？」と聞いて、支援者としては、こっちで遊んでほしいなと思っているんですけども、お子さんがこっちで遊びたいと言ったときには、「じゃ、先にこっちで遊んで、次はこっちで遊ぼうか」と言うと、お子さんも「うん」と言って、お子さんが自分で選んだことが認められるので納得して遊ぶことができるというわけです。お子さんが自分で選んでいいんだと、そして選択したことが認められる機会を、授業の中でも、学校の仕組みの中でも、そうした機会をつくっていくことがまず大事だと考えます。

そして、お子さんの考えや判断を認める、承認するということです。コーチングという

コミュニケーションスキルを聞かれたことはあるでしょうか。スポーツやビジネスの分野などで、目的の達成をサポートするためのコミュニケーションの方法で、そこで重視されているのが承認、認めるということです。

コーチングでは承認は3つあるとされていて、存在承認、結果承認、事実承認です。存在承認というのは、挨拶とか名前を呼ぶ。あなたがそこにいることを私は認めていますよというメッセージで、これも結構大事です。先ほどのこの会議が始まる前に、教育長が澁澤委員に「澁澤先生、こんにちは」とおっしゃっていらっしゃいましたし、私も区長が来られたときに「区長、こんにちは」と御挨拶させていただいて、名前と挨拶で二重の承認をさせていただきました。

2つ目の結果承認というのは、いわゆる褒める。いい結果とか、すぐれた結果が出れば褒める。これももちろん必要です。

3つ目は事実承認。これは結果ではなくて、結果に至る事実、プロセスを承認する。最後までできたねとか、発表してくれてありがとうとか、私としては、特に学校教育の中では結果承認よりも、この事実承認を重視することで、全てのお子さんの自己肯定感を育んでもらいたいと考えています。

以上申し上げましたように、まずは授業の中で、選択の機会と事実承認を重視する。そして、そういう授業が行われるためにも、教育行政においても選択と承認について新しい仕組みをつくっていくことが求められると考えます。これは教育委員会の会議でも繰り返し申し上げていますように、例えば教育委員会として、一人一人のお子さんに応じた発展的な学習を促進していくとか、あるいは、今、不登校のお子さんであれば、学校に行かないという選択が社会的に認められづらい仕組みになっていると思います。そこで、不登校であっても不利にならない成績評価や、進学の際に不利にならない、そうした不登校を認める仕組みをつくっていくことが求められると考えます。

教育委員会として選択の機会、そして選択したことが承認されていくという仕組みをつくっていく、そういう教育にしていきたいと考えております。

司会 ありがとうございます。選択したことを承認する機会をつくることの大切さ、それから事実承認を重視することなど、お話をいただきました。

それでは、ここからは視聴者の皆様からお寄せいただいた御質問について、区長、教育長、教育委員より回答したいと思います。幾つか御意見をいただいておりますが、時間の都合上、一部を御紹介させていただければと思います。

それでは、1つ目ですけれども、自分の子どもは自己肯定感が低いように感じる、家庭でもできることはありますかといった御質問でございます。

こちらについては、澁澤委員、よろしければお願いします。

澁澤委員 私が適当なのか分かりませんが、私、ちょうど上の娘が中学3年で、下の息子が中学1年のときに、うちの奥さんが、もう1回大学院に行きたいと言って北海道大学へ行ってしまったんですね。それから家庭を3人で維持しなければいけないときに、親と子の関係ではなくて、一緒に考えて一緒に結論を出していくということをせざるを得ないし、時は待ってくれないし、毎日お弁当は作らなきゃいけないし、毎日洗濯はしなければいけない。家事と仕事と、全てが混然一体となって全員で役目を果たしていくという状態。それを持てたことは、私はとても自分の人生にとってはラッキーだなと思っています。

それは、社会の中のことに全部つながるし、環境問題にも実は全部つながってきて、何か正解があるのではなくて、とにかくお互いがお互いのスタンスで子どもと向き合っていく。それがやっぱり家庭の中で、正解を子どもに教えるのではなくて、一緒に何かをつくり上げていくという環境をぜひつくられてくることが、私は早道なのかなと、私自身の経験ではそういうふうに思っています。

司会 澁澤委員、ありがとうございます。

それでは、2つ目の御質問です。講演の中でキャリア・パスポートのお話がありましたけれども、世田谷区ではどのような取組をしているのかという御質問です。

こちらについては、区の取組ですので教育長にお伺いしたいと思います。

渡部教育長 画面の共有をお願いします。世田谷区では、児童生徒全員に、このキャリア・パスポートをつくっています。5つ、これから御紹介します。

ざっと説明させていただくと、ここでは「4年生のめざす自分」を自分で考えます。そのために頑張ることを、1学期、2学期、3学期と書いていきます。それで、「6年間のめざす自分」は、1年生のとき、2年生のときと、学年を追うごとに、その年にめざす自分を書いていきます。そして、おうちの方からもコメントをいただくような形になっています。

先ほど澁澤委員から、小さいD oを重ねていって、B e、どう生きるかというところのまさにそこになるのかなと思っているものです。

これが実際のところですが、ちょっと字が小さいのですが、5年生の子どもがすご

くよく分かるので見ていただきたいと思います。

「めざす自分」は、「私の目指す自分は、積極的に行動することです。私のタイプはひかえめな方で、活やくする機会があまりないので、この1年でがんばりたいです」。自分は大人しいタイプで、あまり学校の中で活躍することができないから、少し自分を変えてみたいと思うところで、これを1年間の目標にしています。

そのために頑張ることが非常に具体的で、「新しいクラスの友達に自分から進んで話しかける。」2つ目は、「進んで意見を言う。」そして、「少しずつクラスに慣れていきたい」と言っています。

1学期には、ふだんから周りのことを気にかけていく。視野を広くするというのを1学期の目標にしています。そして振り返りもしています。2学期には、一部の人ではなく多くの人との交流を深めたい。さらに視野を広げたいと思っています。そして3学期には、仲がよい人も、あまりふだんは話さない人も悪い態度を取らず、困っていたら助けて、常に笑顔でいたいですと書いてあります。

ここからが、お家の方がこの子にコメントを書いているんです。そこが言語的説得という、先ほどの藤田先生のお話になっています。とても素敵な言葉なので読んでみます。「自分から話しかけたり、笑顔を心掛けたことで親しい友達が増えたんだね。その調子でどんどん自分の事も出せるようになると、ますます友達と良い関係が築けるようになると思うよ!!」と、保護者の方が、子どもがこうやって1年間取り組んだことに対して評価をしています。

教員のほうも評価をしています。時間がなかったので次に生かさせていただきます。

それから、次が中学校のキャリア・パスポートです。中学校は、もう少し詳しく書いています。どんな部に入って、どんなことをやってきたかというのを小学校のときより詳しく書いています。

ここで注目すべきなのは、保護者からこれに対して言葉をいただいています。これも人生の指針になりそうな言葉をいっぱい書いてくれているので、小さいので読んでみます。

「中学生のときからこんなに先のことまで考えるなんて、正直驚きました。将来は何が起きても柔軟に対応できる力をつけて、ワクワクしながら目の前のことに全力で取り組み、将来に繋げてくれたらと思います」。2つ目の保護者の方は、「様々な経験を積み、様々な人と出会う機会を持つことで将来のイメージがつかめるようになると思います」と、そうやって保護者の方も将来のイメージをつかむためにどんなことをすればいいかということ

を書いてくれています。最後は、「自分で好きなことのアンテナを立てながら歩いていけば、やりたいことが見つかるはず」と、自分の好きなことからやりたいことを見つけましょうということを保護者の方が自分のお子さんに対して伝えています。このように、将来の考え方を保護者の方から教えてもらっている例です。

最後が、これは中学生のキャリア・パスポートです。これは結構面白いので見てください。「英語が話せるようになる」というのがこの子の1年間の目標です。そして、志望校に合格する、友達から信頼される、そしてずっと見ていくと、最後に親に感謝するというのが目標になるんです。すてきなお子さんなんですが、そしてそのために頑張ることを見ると、今までより勉強量を増やす、そのために特に数学も楽しんでできるようにする、友達が挑戦することを応援する。最後に、日常から親に対して感謝の気持ちを態度で示す。とてもすてきなお子さんだと思います。

最後に、このキャリア・パスポートでは、2点が大事だと私は思っています。子どものメタ認知力を上げることと、今の学びが将来に役立つことを子どもたちに知らせることだと思います。それは、教員も、保護者も、地域もみんな同じだと思います。

司会 教育長、ありがとうございました。

それでは、お時間都合上、次の質問を最後とさせていただきたいと思います。最後の御質問ですけれども、外国と比べて日本は自己効力感が低いようだ、先ほどの御講演のお話も含めての御質問ですけれども、各国の取組から参考になることはありますかという御質問です。

これは、海外の教育にも詳しい区長から回答していただければと思います。お願いします。

保坂区長 グレタさんという女の子が、たった1人で学校ストライキをやって、地球はこのままでは自分たちの世代のときに生存不可能になるということで、大人たち、政治家たちに10代の子どもたちが変更を迫るといった動きでした。世界中に広がり、日本でも中学生、高校生が反応していますけれども、オランダに教育委員会の視察で行ったときに、オランダの高校生生徒会連合の事務室に行ったことが、中村教育委員も一緒に行ったんですが、すごかったんですね。

とにかく我々は生徒会連合で、高校教育に関して政府が政策を変えるときに、必ず生徒自身の了解を得るように国会議員たちと交渉するんだと。そういう意味で、ロービーイングをやっていきます、記者会見をやるんだと。場合によってはデモもやるんだという話をし

ていて、オランダ政府が1億円ぐらい出して、生徒会連合のオフィスがあって高校生たちが大人を雇ってと。世田谷の中学校生徒会と交流したいという申出もあったんですが、実現はしませんでした。

要は、さっきのPISAの調査にもあったと思うんですが、自分たちが社会や国、あるいは地球でもいいですけども、変えることができると思っていない子はすごく多い。実は、そういう意味で、シチズンシップ教育が非常にこれから重要になると思います。

自分が社会の中で、ある出来上がった社会の中でどのように生きていくのかということではなくて、市民として、それぞれの見えない他の国の人たちにも心を通い合わせながら、どんな行動をしていったらいいのかということも小学校、中学校の頃からディスカッションしていく。そういうことをしょっちゅう話をして、家庭でもそういう話をして、そして考えていく。そのところがまだまだ日本では欠けているのかなと思いますので、これからそういうシチズンシップ教育ということに対して、自己効力感、肯定感につながるころとかなり密接な関係があるのかなと思います。

司会 ありがとうございます。これで質問コーナーを終了したいと思います。

それではお時間が迫ってまいりましたので、意見交換のまとめに入りたいと思います。

最後に、区長にお伺いします。本日の議論で、区長と教育委員会が共有しました内容を踏まえて、予算の編成執行権を有する区長の立場から、世田谷区が目指すべき教育の将来像と今後の具体的な方向性についてお伺いしたいと思います。

保坂区長 今日は大変長時間にわたって、教育推進会議のほうでは乳幼児教育のお話、そして現場からの声を聞かせていただきました。やはり子どもたち、特に赤ちゃんの頃からどのように世界と向かい合い、発見し、その中に自然と学びや育ちがあるのか。そういった環境を今度は幼児教育や保育の中でどういうふうに意識的にサポートして伸ばしていくのか。遊びがキーワードだよと、このことが非常に強く印象に残りました。

何が起こるか分からない、ある意味では、友達が仲間外れになったりするようなことも実際に配慮しながら、毎日毎日が同じことは二度と起こらない、その幼児教育、保育の現場で、すぐれて自己肯定感につながる取組が確かにあり、そのことと、今、教育長がキャリア・パスポートの話をしてくれましたけれども、いよいよ日本の教育が、先ほどの亀田委員からのお話があったように、100点満点で間違えた分だけ点を引いていくという減点主義でずっと長いことやってきた。それをひっくり返すと、加点主義というのは実はあまり定着していないんですが、多分35万点というのもあり得るわけなんでしょう。

そういう意味で、積み上げで、子どもたちの評価を少し変えていくようなことも、この自己有用感や効力感、肯定感につながっていく。PISAの調査と教育長が紹介してくれた文部科学省の調査が大分違うので、ここはちょっと突き詰めて、どうしてそれだけの開きがあるのかも見てみたいわけですがけれども、ただ全般的に、日本人の18歳の若者の日本財団の調査を見ると、やはり自己主張、あるいは国や社会に対する関心や課題意識、また自分が支えているんだよという、自分がこの社会を支えているんだといった気持ちもかなり弱いように思います。

これからの時代に、子どもたち自身に選んでもらう、そしてつくり上げてもらう。そこはやはり間違ふことや失敗することに対する許容というんですか、そこが広がらないと大胆に踏み出してトライできないだろうと思います。そういう意味で、我々大人の価値観を、あるいは考え方をもう1回根本から見直しながら、どんどん伸びていく子どもたちの成長、そしてこれからの社会を生き抜く学びや成長というものを世田谷区で、まず教育総合センターが12月20日にオープンしますので、そこから大きく発信していただくことを期待したいし、今日のような場をもっともっと重ねていけたらと思っております。

司会 ありがとうございます。

以上をもちまして、本日の第2部令和3年度第2回総合教育会議を終了させていただきます。途中音声が入る等の不手際がございましたこと、おわびいたします。申し訳ございません。

なお、総合教育会議は世田谷区の公式YouTubeチャンネルで配信しております。本日の会議の様子に合わせて、過去の会議についてもぜひ御覧いただければ幸いです。

改めまして皆様、長時間にわたり御参加、御視聴いただきましてありがとうございました。

午後4時閉会